朝夷巡嶋記

第三編

巻四

へ13
704
14

門
號
卷 44

文榮堂發兌文房書目

考槃餘事　明李日華小品　東溪源謙校　白紙摺明朝綿帙入全部四冊

題畫詩選　岡嶋盧門著　全仕立全三冊

書畫皆宜　美髮氏撰輯　白紙摺明朝綿帙入全部二冊

題畫詩刪　倉川行德著　本仕立全一冊

書舗　退華心齋鐵懸橋北第五街　前川源七郎　文榮堂

四十六

明治三六年十月九日購求

東都　曲亭主人編輯

中輯第廿七

鸞鳳の日蔭花　副将の晩之月

信夫荘司元晴ハその日より義邦の動静云為を試るゆ辞寡しく信あり。才高しと雖かゝ加以その容止美麗ゆゑ傳多く侍べくもあらねば。

ちゝろよりふかく愛敬しいく程もなく廣光ゆ嫌妬せくその孫女笹姫を義邦ゆ妻けりくられべこの笹姫とゆえしハ実ハ前伊豫守九郎判官義経の息女ゝ往時文治三年高館の城中ゆく生れ給ひ死かくて新地五年閏四月晦日泰衡が野心ゆより高館の城攻られしゝ死判官ゆ妻子を刺殺しその身も自殺しゝ程ゆ元晴竊ゆ件の姫うゝを救ひう。

ゆゑ隠しく養育し笹姫と名つけたり。今茲八二八の春秋あり。紀現義経の像見とゞめこれ一ちらのこゝあるべき笹の名さへ負せしなるべし。いもせ八同姓を娶らぎとゝ本文あるども後世八さゝ沙汰よ及ぶど義経と笹姫八正しく従弟どもわりく共よ日蔭の花あるどもその才色八劣らぎど優さぐ。終ゆ世ゆ出ゆん時ゆもあひゆんとその方ざゆの人八ゆゝり。されども義邦八只顧よ辞退しく且くうけ引ざうしかど元晴頻ようち歎て某八子共駄もちられども不幸ゆゝく皆世を早うし剃判官よ進らもる。嗣信八八嶋壇浦の戦ひよ陣歿し忠信八吉野よ留り更よ潜びく都よ上りいく程もなく自殺しく兄弟共よ忠臣の名をのゝ遺せ故郷ゆ二人の婦八尼よありて越後國よ赴紀出雲崎よ草を締く年来行ひ澄しゝ是さへ去ゝ歳打つ紀く往生の素懐を遂ゝう。

（作者云越後の出雲崎）

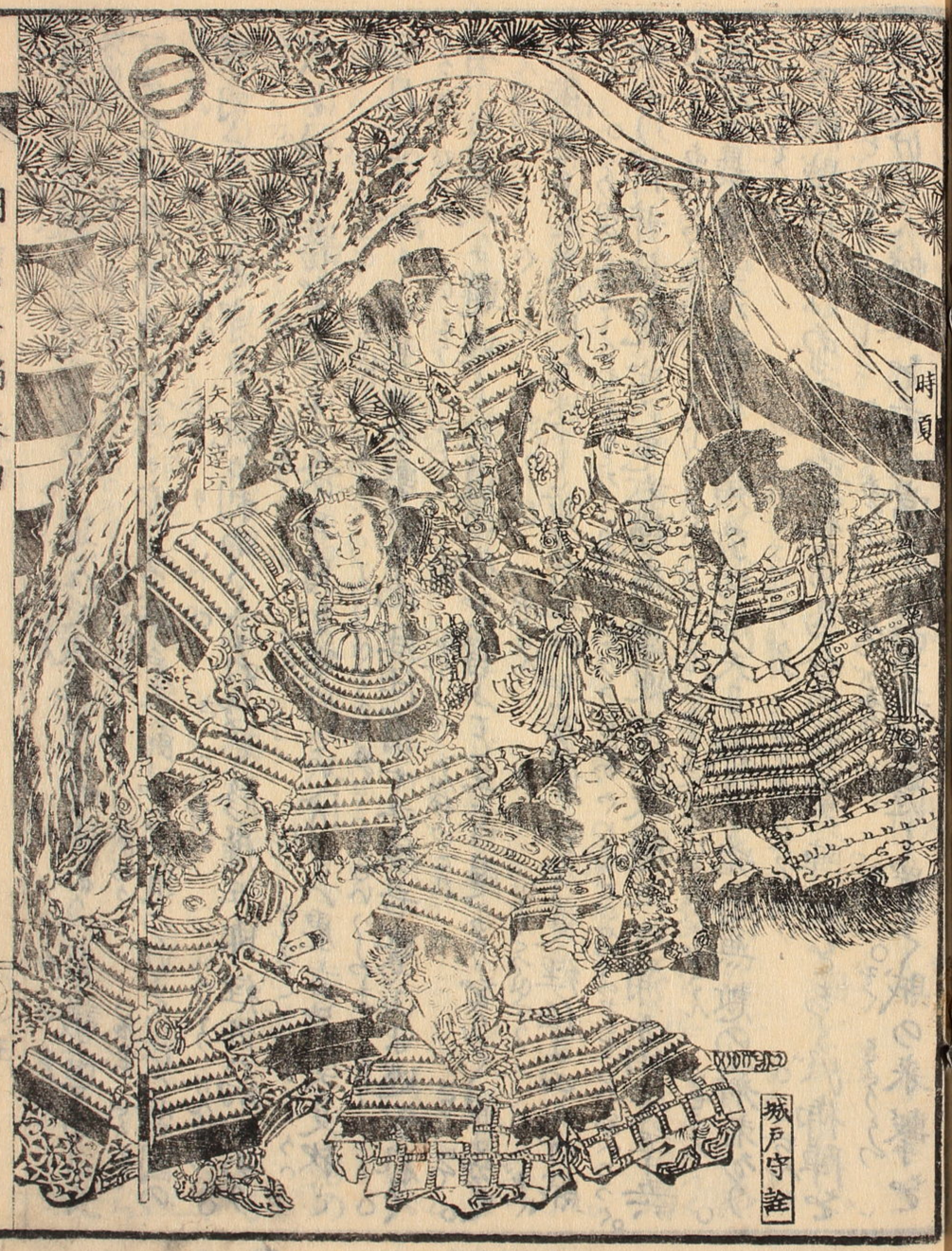
尼瀬田とゆ処あり。こゆ嗣信忠信ゆ後家の尼あゝよ来りて住し処之とゆ一説よ佐藤庄司元晴ゆ後家ありとゆ寺泊よ嗣信忠信ゆ石塔婆あゝびゆれあれ。その古迹よありて尼瀬の名をゆ負せしゆゝ。某今八妻もゆく子もゆく嫁よさへ捨られうゝ誹らるゝよ後をゆん犬馬の齢七十餘歳惜くもあゝぬ命ゆゝども心よかゝるえ姫うへのゝ昔もかゝゆ赫奕姫ゆ親ゆあゝぬ翁ゆ情願只ゆのゝみと。即ゆゝく口説しゝゆ義邦八元晴ゆ誠心を感佩し竟よ推辞よゝゆて。この婚縁を結べゝかゝく婚礼の式をゆゝよゝゆ潜びやゝゆゝ支終りて。その三日の壽紀よ元晴八腹心の老黨水草十郎昌甫城戸三郎守詮ホを集會く酒ゆりくゝしゝうけゝ夜足利左馬介義兼の軍兵催促状到来せその略よ云反逆人藤原泰衡ゆ残黨大河太郎兼任ゆ子経任宇修羅五郎先亡の餘類を聚めく厨川の古城よ蜂起し頻ゆ進で平泉の柵よ縁るよし近属をゆゝえあり因茲義兼鎌倉殿頼家の卿

武命を蒙り征東の摠大将として刀野時夏副将として則九月晦日に足利を
進發し上野下野の軍兵数千騎を引率して既に白河の関を踰て
速に内の軍兵を駈催し路次まで出迎ふべき者也とぞ書て元晴
讀訖て眉を顰めこの足利左典厩ハ歴々たる源氏なれ且執權時政の
壻なれば追討の大将さもあるべし時夏何ぞのもとなれば副将軍に拜せ
られて長生をもれバさもぐるる珎支をもなくりのがれれば此度の合戰ハ
果敢なしかるべうして總嚴命なれバとそなれ時夏ゞ下に立んや傍痛し
と咳て聽て答書をもて老病にもあらず歩行自由なるぞと称し次の日城戸
三郎守詮を大将として軍兵二百騎を義兼の陣所へ遣しこれより義邦
廣光をもは深く潛しうさ程に刀野太郎時夏ハ曩に執權時政の
内意を得て竊に歓び恩赦遲しと俟ものゝ三伏の暑の日ハ早晩

秋の初風に立うれども沙汰もなし。あまりの心ずくさに又一計を思
ひて腹心の若黨矢塚達六とふものを鎌倉へ遣し義邦義秀并平
等をのびくに陸奥に赴て平泉の柵に入り経任重くこれを用ひて民の
心を攪しゝ六郡の愚民屬て既に大事に及びぬと流言をせうける。
件の矢塚達六ハ年来時夏に使れて奸智あるものなれバ并平がをこだりて
ありおのづゝ出頭して刀野ゞ家の宰ありかゝる程に時政ハ件の流言を傳
聞て大うこゝろ駭騒て且その始終を慮るに彼義邦ハ蒲殿の子といへバ
経任これを主かして義經の故事に倣ひ愚民ホを釣るあるべし又朝夷と
いふ奴ハ万夫不當の勇ありと雖も加るに并平ホ此彼経任を資あバ虎に
翼を添るに就中憎くも憎飽ざるハ并平ホ造奴ハ總角の比よりして
仕へく恩に負て又時夏に從もれバいく程もなく義に背くべし彼奴を

生拘りて由井濱より斬梟ぶべきなれ世の人よ笑ひん。憎むべしと敦圓つ。
聽く吏の趣を執達して足利義兼を追討の揔大將とし刀野太郎
時夏を召還しく義邦謀叛の告訴を誉めその勸賞として此度の
副將軍に拜任しその本領安堵の外及新恩加增せられ八軍功よ
べとて馬物の具を牽うけ時夏竟よ謀課せく志願一朝よ成就せ
く歡喜雀躍して恩を謝し且く執權の館よ止宿して時政父子に媚る
て餞る狗よ異ならず。七月下旬よ足利へ立ちへるく軍議の席よ預り
けり。ちうなこの頃義兼秋暑よ冒されく八月もいづくよ送りつ上野
下野の國くへ豫く御教書を分ち下して軍旅の支度整へども。
大將の病著よりく吏の下ぶとくして九月も日數絶よ至りぬ。
時政おく催促をされよりて義兼ハ命ぜ全く愈ざれども病を推し

その晦日よ下野を進發し白河よりぞ進ぶる軍兵數凡三千餘騎副
將軍時夏ハ華やかなる物具して太逞し駒馬よ乘り一千餘騎を引卒
おく先陣よ拍せるこの為体いかく四下を拂ふえよりかく義兼ハ
日よ日くと五六里ばかく後れて來つる味方を待つけ十月八日よ國府の城
宮城郡よ來著して兩三日人馬の足を休めあく地理を問敵の强弱を
考ふる程よ信夫莊司元晴が老黨城戸三郎守詮ハ會と元晴が
口狀を述べく義兼則守詮よ鄕導させく遥よ江刺郡あぞうちよせ。
鎭守府のわたりなる膽澤の神の社頭よ到りく祈願のすがらく要害の
地よ陣しうこの処膽澤郡と境をおべくく經任が盾籠る平泉の柵よ
遠くぶ當下義兼ハ諸將を聚會く軍議を凝らし賊のうち寄せを
俟く戰ふよ利あらん欲進て攻るよ利あらん欲と吏の異見を問れぶ。


時頁
矢塚達之
城戸守詮

時頁騎く
守詮が
軍議を
折く
足利尊氏
高階兵衛
矢田重四

寄せ来たらんといふものあり。進んで攻んといふものあり。衆議區々なり。一決せず。義兼遥に坐よりて城戸三郎を呂近つけ汝は當國の案内なり攻ると守ると孰か利あるべきや。三郎曰く修羅五郎經任は幻術あり。雲を呼び霧を起し人の耳目を迷はすといへり。こは虚言か実か支か。と問れて守詮さゝひ兼任が撃れし比經任甫十五歳岩鷲山より逃かくれ有一日異人より邂逅し左道の術を習ふこと三年是より幻術をもて愚民を迷し竟に逆乱をなすといへり。又經任は四人の賊将あり。神井猛虎字火鬼六鐵盾重連字矢藤五坊浦方相字五十五六蘇途暴道字鵜東二須弥の四天に擬る兇悪無慙の癖者なり。この他賊将多ほあるべしといへども烏合の悪黨陣法をもつて御陣を些退けるく八幡林を前に當あるに軍兵を隠し置く賊の来撃を

引つけ軽く戦ふく敵を驕らせ伏兵をもて後陣より差こくるいとく攻バ經任の幻術も行はれず暇なく一挙して擒にせ急に柵を攻させバ賊徒脱るゝ能はざるを勢せ志を同うし防禦その際なるとき八速に落べうして寄せの退屈するを窺ひ或ハ夜撃或ハ朝懸出没不測のる段を竭さバ御方の勝利おのづから時日を送りて兵粮乏くなることあるべし。

大支よりの使者と憚る所もなく答へしくバ義兼頻に点頭後人と氣色なく左右を佶と入れバ刀野太郎声を激し宇詮汝何物かれバ無用の舌を動かす陣中に敵の勇を説りのハ大将の忌とする平家富士沼の敗北も彼齊藤実盛が無用の辯よりつくし揣るに經任幻術ありとはいふ原是小児の戯れのみ大兵一下すべし城に臨まバ身を脱るゝに暇なく然るを況幻術をや既に武命を奉て二毛の大軍當國の御方をなくこの処

あぐく寄せおらしいおぐく城を攻めーく陣を移ーく退うバ支よ臨うく不吉ゑ時夏
不肖あれども副将軍を辱せいうぞう田舎侍の臆説よ多懼しうく賊の英
き氣をあぶとをせんや傍痛ーと冷笑ふ守註ハその言の行れざるをべく遂よ
再びあいいむ面目を失ひく舊の席よ退けバ時夏ハ摠大将義兼よ會釈
あく。あれ某が一隊をもて柵を乗取いん本陣を進られく御方の英氣を
資ぬぐ勝利疑ひのとよ義兼ハ執權の由縁の故よこの年来扶持しる
時夏が恩免を蒙うく副将軍よ拜任せうし鎌倉より退りーと時賊の
内意あり渠初陣のるかあれば貴所の扶助よよくぐて功名を取りかと
うくんこのあるをぬくあうるべーと消息よせえーうバともかくもーく時夏ハ
軍功あくせんとるよあるく今その大言をせく莞爾とうち笑を勇あうる。
勇あう哉よや計略とふともいあぐ賊の柵をんを矢の一條も射うけ

ぎーてこの処を退ぐべ賊の英氣を倍ものと義兼ハ後陣よ續人攻一攻く
ゑるべーと愉く許せーぐバ時夏ハ依然とーてなのが陣よ立ゑへり軍兵の
部ーてをや真先よ騎出せぐバ。その隊の士卒一千餘騎隊伍を整へ旗を
進め平泉の柵へ寄せる程よ摠大将義兼も二千餘騎を三隊よ備へ徐よ馬を
進めうり是より先よ經任ハ追討の大将義兼時夏三千餘騎を引卒ーく。
をや江刺まで推寄せ来つ鎮守府よ屯ーうと注進擬の歯を挽ども些も
驍ぎ頷くのと股肱の賊將神井鬼六鐵盾矢藤五ふを召近つけ義兼ハ
名家の子孫ゑよ熟ゑる老黨も多かるべく且沈重ゆうく思慮ゆうとせけハ
侮りぐ敵るあり但時夏ハ黄雀のと貪り啄く飽ことをあらぐ曝まれ
早蠅五頭平をもて渠を引入させられども五頭平果敢く生拘られく。
遂よそのう成らぐうぐされバ今度の戦よ時夏が副将ゑるハ則味方の幸と

これ既に謀を設置つ鬼六八五百騎をねく泉川のこゝに陣して敵の
川を渉せをゝんべその中流に到るを撃又矢藤五八三百餘騎をねて竊に
川上の趣旨暗号を候く堰留あるを一度に断く落せよ敵の
疑ふく泉川を渉さべ八罵り辱しめく怒せよこの他の進退機に臨
変に應じて欺引せ時夏を生拘るべし凡義兼を敗ん
と石に卵を擲より易うよく せよかと説示せべ鬼六矢藤五須掌し
あのく賊兵を招く柵をそうる程に刀野太郎時夏が一軍泉川の上に
到く前面を信とえまくべ賊兵徳に四五百騎河原面よりもそう
時夏うち見く冷笑ひられバそをくとうるとへ異めく賊へいく小勢
なを河水も亦浅やうれバ膝の上を過べくべ衆皆渉せと下知せれば
城戸三郎諫めくいかう賊八小勢にんれども戦ひを持るハ別に謀ある

あるべし且この川八恒に水高く流急う況や雨後のことなれば水岌の
増べきに俄頃に浅瀬にありうるハ不審し後陣へ謀り合させて後にこと
いへもあへぬ時夏呵くと冷笑ひ和殿へいく臆しうるれハ其許の
郷導をうるまべ如此ぞ後陣に退るべ大将に注進せよとくと焦燥
めぞ守詮八ら勢をねく驕く後陣に立うへり云くのよしを告しうバ
義兼ぞく冒を顰め守詮ら異見さもあるべし時夏ら血氣に乗
ぞく川を渉さべ過失あくん速に禁めよとて老黨横田重正を遣しく
時夏にこのこゝろを招させ又城戸守詮に軍兵三百騎をよす加え敵の堰
ことのやとて遥に川上へ遣しうかうし程に重正八馬を先陣に乗
走らしく時夏に封面し大将の肯を述く叮嚀に制めべ時夏八争ひ
うるく前面を視く扣う賊将鬼六猛虎八寄るの川を渉さべ

又く高島兄弟の者ども、かゝるよ罵らせ或ハ馬より立て沙石の上より投もあり、尻をこゝ向くおそれて笑ひあり傷者無人の為体なり。時夏ハ怒り給ひ介殿（佐馬介義兼）あまりに速慮しく辱らるゝことかなしく。烏合無慙の逆賊おゝいなるの謀を為ひ給ふ彼撃敗らせ。と教関つゝ真先より馬を進めく川へ颯と乗入れう相従ふ早雄の軍兵四五百騎食後もゝと川を渉ひ給ふ浅うられば後れしのも逸足ゆしく水中より立う浩処より敵の陣後より一声の鬨音響渡く。一道の烽燧民地仆る程なれ川上より断落ち水忽然と激流して流され先より進し兵ハ辛しく向の河原より跋登るあれ二百餘人待儲う敵兵より射倒され砍伏られ生くかへるハあるけうそゞ中より時夏ハ馬の

平首より抱ひ著徒卒矢塚達六ハ主の馬の尾をもよかるまゝく流るゝと十町ばかり敵の抓子棒より懸られく主徒共より阿容こと沙上より引上られ軈てゞ索を掛られけう先陣墓なく敗れう。とまゝく後陣へ支えしゞ義兼ハ救ん為く頻まよ諸軍を進めしかども刀野主徒ハ生拘られ。急流溢漬りて渉きくもあるゝ只管空箭を射るのを亦せんもゞハあるゝ当下神井鬼六ハ鞭をりて義兼を両三こゞさし抱けバ衆賊哄と笑ひて勝閧を揚生拘を牽立く徐こと退く程より寄るの士卒ハ眼を睜り拳を捺りて眺く義兼怒氣胸より満くゞ大息吹ひ特夏漫より血氣より早りて軍令を用ひゞ味方のを影撃ゝその身も擒ひ生られうれり刀野を救ひ給ハ北條殿。何とうふべき。この川堰る水あるゝ落るとも速あゝん日あゝ柵を攻破りて時夏を

救ふべしとて血氣の者共は怠れぬと後悔しく領守府を退く程なく城戸三郎守詮は大川を川上より到らんとす中途ふかしと水嵐の紙項を増さんとく先陣川より入りく敵の謀に陥つんと今は甲斐なし。

其処より陣所へ還りて案下某生再説修羅五郎経任は神井鬼六鐵盾矢藤五ホゴ注進遅しと候程に果して鬼六猛虎は時夏主従を擒ふし矢藤五と共に帰陣して勝軍の吏の趣巨細に告げ経任ふく歓びく両人を労ひ迺衣裳を更く壮丹花の間に出しく経任が四天王珎浦五十五六蘇塗鵜東二神井鬼六鐵盾矢藤五この他の賊将十餘人さるくの身甲して大力を帯戟を執りその左右に侍坐しく又庭上の器械を樹立弓箭を取る賊兵二百人齊くとして隊伍を乱さず。整くとして列をなせりかくく五七人この賊卒は時夏主従を縛めく。

大床の下に牽居く経任これを詰と名く案は寄手の大将狩何と呼ぶるものゆゑんと考ふるに良に問しく神井鬼六進を出げ将軍も豫ようその名は知食ふ人渠は寄手の副将軍刀野太郎時夏なりと告げを経任は豫く和殿の人と雖を傳ふ景慕の思ひこがくく竊に五頭平をもて愚意をかよへ既に好を結びしく此度寄手よりとは怨敵の誘ひをなさざる内應せるべくくんといと憑しく存ぜしまとか士卒悦く矢を射ふけ刀をかざ元刺擒に成せしは慮外の失礼慚愧に堪ざるし舊交を忘れざるは許しかへとうち勸解くして聽くその傳を釋迦をのみを携へく上座に誘引へべ鬼六夫藤五これをんで遠しく席を避不慮の合戦を賠話ふよう時夏は恐ひくけ助命せるそのこゑ〳〵その

管待等閑なるべし且愧且疑ひく賓席より著ぶ袋を被りし猫の如く頭を垂れ尻を卑くし逡巡せのみをれば經任遥に達六を指さして渠は何者ぞと問へば時夏これをえうくうして某が腹心の家隷なりと答れば達六が傳を釋放させ咎のがし主の後方より待せう。當下時夏やう屋くより挙る額の汗を拭ひ某豫く將軍の尊意をうざるよりうぶれどもいうあせん愁より擇ことをれし副將の大任脱れぐく陽より武命より應じうれさがれ某戦ひよりあるうればうち負く既より擒よりあるくを許さるのことあるで賓主の礼りてせらるるの再生の恩知己の幸。何ぞ我られよりあるん用ひらるとあるべ筋を断骨を折り犬馬の勞を盡せべし貳あるやと誓を立く娼しるべ經任ふく歡びて既よりへるとぐくあるべ則ち幸ひ之席を更めく勸盃せん誘へと先より立く後堂より伴ひつ新衣裳を出して濡くう衣を脱更させ賓主の坐定あり。准備をしうけんいと艶妖あり婢們十餘人もあく盃盤を捧げ美酒佳肴を按排べく時夏より勸めうる盃ハあるどよりたるあく順より遠らし。逆より返し既より半酣より及ぶるる歌妓ホ声妙より歌ひ奏ぶる管絃ハ鄙ゆるあれど趣あり仏國よりとゆ迦陵頻伽めくいと愛さし浩処より年紀二八あまりあり白拍子水干より烏帽子しく扇を閃しつく舞ひそうこハ經任ふ妾あり陸奥、二の美人とゆえし文字揚とゆ艶婦あり時夏ハ既よりその艶曲をめくく心耳を蕩し又この歌儛を觀くく魂天外よりあり文字揚ゆ花の顔ハみより野の春も數あるべ又嫋やうあり柳の腰ハ安積の采女も及ざるべし文字揚儛くく左より遶れバ時夏ゆ晴左よりり文字揚立く右より寄れば。時夏より晴右より在りこの時ゆくく人よりのいくくをもつべ持る盃の

傾くを覚ぜ歌舞ハ三曲のみく果しうゞ経任ハ文字揚を召び果らせく。
もつく酌を執らもう程ハ時夏駱酊して泥の如し又彼刀野ゞ家隷矢塚
達六をもまの所用をうけかハれもく間近く侍らせくその饗膳主の
時夏ハ異かうとうしかくて経任ハ時夏主従を誘引くまづ土庫ハ赴紀て
金銭財宝の多紀をんせく軍用ハ乏しかゞうを示し又駿建ハ〻ゆゝる
倉廩ハ趣く山の如く積上ゝる兵粮ハ数年の貯あるを示し又兵庫ハ
赴紀く武具矢種ハ富ゝるを示し又衣倉ハ赴紀く倭羅錦繡の多紀を
示せバ時夏王従ハ観毎ハ嘆賞し往時六郡の主ゝう〻泰衡按察使の
富といふもこれにハあるべきぞ稱ゝかゝう〻程ハその日も暮ハられば。
経任ハ燭を續せく夜燕を催し更闌く主客酔を盡し各臥房ハ
入るハ及びくなるも時夏を釣んゝるハ冬の夜長紀頃あれば寢の間ハ

せられもく彼文字揚を遣しうれば時夏忽ハ望ミ足りく十分の歓び
あり又文字揚ハ経任ゞ密意を沿ゝうあれば飽まぞハ媚を献じく。
小鹿の角の束の間もまぞとゝふ私語ハ時夏まもく現を脱して身良
ゝくハ體を合せん死ゞバ日同穴ハ蕊らもんとぞ契りゝ既中て第
三日の曉昏ハ経任ハ時夏を閑室ハ招ゝいゝうゝ志願空うゝぐ。
和殿ハ對面せ一日ハ捨ぐ死恩あゝ願ハハ水く留りて富貴を共ハ
受ゝへうゝ鎌倉ハ帰参せゝとも頼家暗弱ゝく政事ハ親まぐ時政
父子をもく外戚の威を逞くし黨を樹権を弄びて喜怒賞罰おのゞ
この故ハ喜ぶとゝハ功あゝをも賞し怒るとゝハ罪あゝをも罰せゝ彼
暗君ハ仕へ彼賊臣の蔭ハよゝんハ石を抱紀く淵ハ臨み薪を負ハく
火ハ近つくゝう特ハ危紀ゝゞ。もゝれども。かゝう去んとゝゝゝば強て

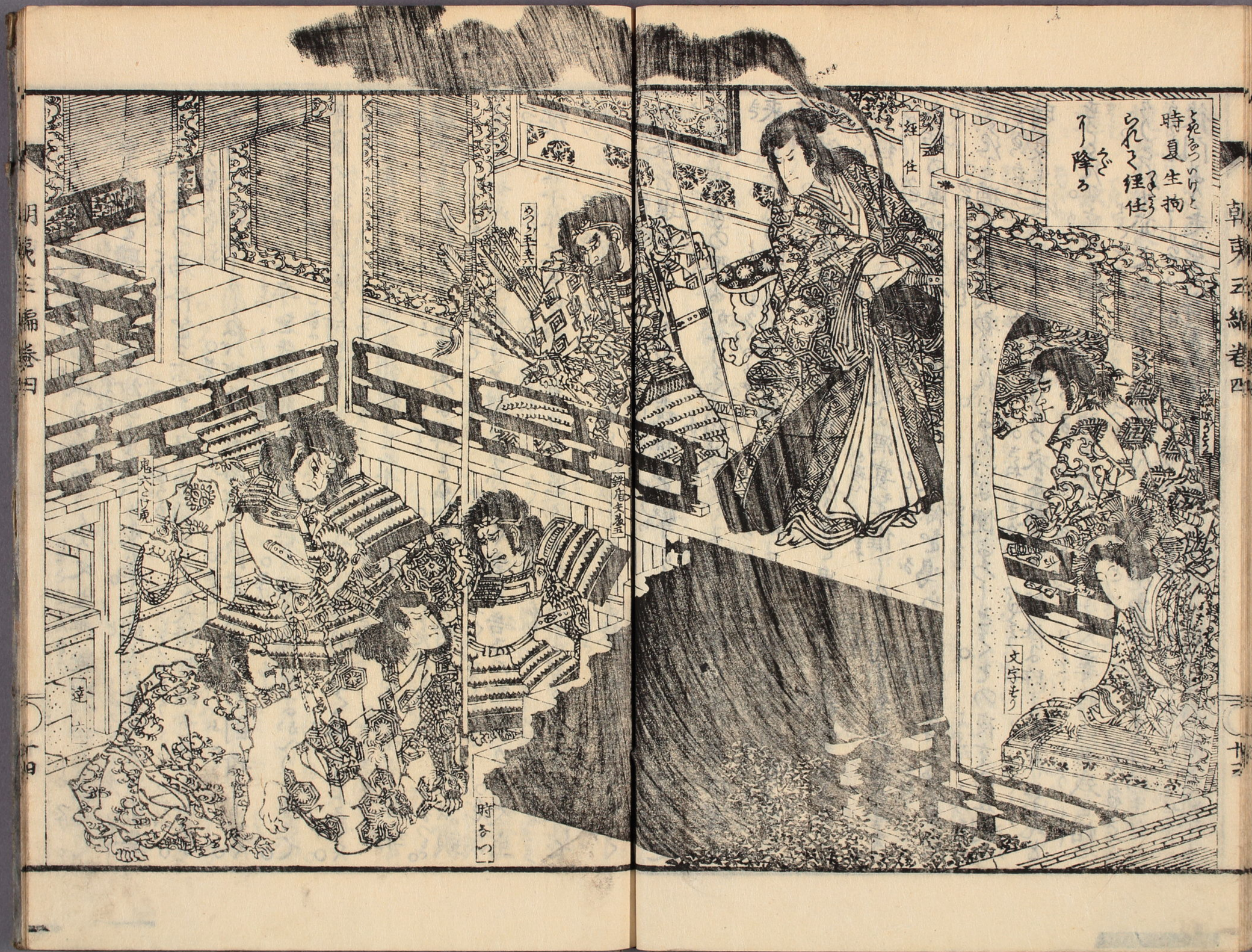
留んとあらば。抑經任不肖なりとも厨川は義兵を起せしより戰へば捷攻まれば取る膽沢より北のかた外の濱は至るまで悉皆我が有なり。進て敵地を畧し退くは自國を守り進退出没自由を為ん加様

これは亦一術あり雲を起し風を呼び草木をもって士卒とし瓦石を撲く牛馬と成在鎌倉の大小名貞を竭しく推寄来るともこれ只屑ともせじこれこそ口は咒文を唱れば一衆の黒雲經任が頭の上は天靡降りて暫時姿を隠しぬ時夏は幻術は呆れ惑ひ。

これ敬ひ遁愛こそ妙術なれ寔は將軍は天の作る英雄はなりとぞいふ其故郷は妻子も家も誰が為は富を辞て鎌倉は還ることを願んや只いのまでも君は仕へて死をもって恩は酬ふべし。疑ひなかりとぞいふ經任術をおそれて快然として

小膝を進めて云ふ義兼を擊るはいと易し和殿主從今宵寄手の陣はかへりて簡様なる説を明日義兼推寄せ来るべしその時は云ふ簡様なると巨細は謀を密語べ時夏は感佩し。この謀究めて妙なり。異議なく領掌あるべし經任は歓びて更は酒宴を催しぬ折しもあれきのふの木枯の風吹暴れて木葉を落し枝條を鳴らして物の音も凄まじ紀は猶且宵間のうれいはよろづは便よろしとて。その夜亥の左側は時夏は主從は舊の鎧下なりて衣は被更て經任は辞し別れ去んと。

紀は文字揚は時夏が袂は携り泣沈む。要時の名残を惜これも亦丈夫のあるを釣んと忻る倫なるべしかくて件の主從は後門より走出て寄手の陣へ赴く程は時夏は遠六は彼謀を説示し


明朝三編巻四
朝東五編巻四
とゑつのけと時夏生拘られて縄仕ぐて降る
紅住
文字もり
時さつ

経任は一味して寄るを破るが可かんと又左典厩をりかへして実を告て。敗軍の咎を贖ふべき欤汝が為いかゞやと問へば達六沈吟して某項日平泉の為件を思ひ士卒勇猛やゝ大将智謀は長うかるは軍用兵粮乏しくねば攻るとも落べからず。君は寄るの副将とし一戦は数百の士卒を失ひ贖擒はせられく逃て陣所はかへりしとて。平泉の柵破れぬは何をもく功とせられも幸ひ異なるとれく。鎌倉はかゝりあるとも本領は三千貫経任は従ふと紀は富貴歓楽疆かしられをもく出ろは擇ぶと答ふ時夏ゆくうち点頭られも如此思ふ。寄るを謀るは易く実を告るは却難ふ人生は五十年犬馬の齢を貪りく區〻ふの下はをんや寄るを敗れて逃へべ修羅が軍威はおもく振ふく奥羽は敵はあるんかくその由断を窺ひ経任を殺し柵を奪ば奥六郡は己が有べし。ふや其所はぐるべとも文字搦を柵は遺しるくられ又寄てるの陣はあるんや努此彼は暁られか秘は秘と密語つ主従齊一直走しくその暁ふは鎮守府ある寄るの陣は立ふるく云ふと嶋門けるこの紀搦大将義兼はかは臥房はあり時夏主従かへり来れるはを出く先訪りく後は歓び聽く起出く衣裳を更召入るく對面はる程は天は明ふ義兼は床几をもあちく刀野生恙はは是へくと招紀はるべ時夏膝行頓首しくおそるく進て近つ紀某只管血氣は早りく軍令を用ひぞ敵の謀は當られく影の士卒を失ひ主従二人擒はせられく武恩を忍諸るあぞはこの辱はあへると顧れば面目かられとも禍福は糾る纏の如し始終の勝ては勝るめ某擒は

せられ〜故よ不憶便宜を始う一挙〜く経任を討滅さんと疑ひ
事。といひを義兼安あへば。そんよ〜あべきうまことも和殿主従いうホ
あく輙く脱れ来いるぞと向ハ時夏莞爾と笑をされバ〜そのす
あれ。某主従獄舎よ繋れ脱るべくもあらぐ〜よ。これを管る獄吏ハ
元来泉三郎忠衡ガ小卒ありし古主忠衡ハ泰衡よ殺れその父経任ガ
親兼任よ殺されうあの故よふく経任を怨むといへども弊ひ已ことを
始ぜ駈入られく。平泉の柵中よありといへり。あをのく某を竊よ
憐むこと舊識の如〜きのみ傷よ人あれをり時夏よ密語るやう。
られ翌の夜ハ和君主従を放遣るべし。寄るの陣へうへり去さらんく
柵を攻させへこの柵西の城戸ハ嶮岨を頼く守兵甚をけ〜日暮
あバ火を放て西の城戸を開くべし。大軍其処よりうち入らバ東ハ攻ど

あく敗れつべ〜。かくく経任を擒よせんと袋の物を取るガ如ん努あや
まらるるかといへう某安く其許の謀佳妙といへどもるガ主従脱去らバ
その咎必内迫よ及ぶんその身罪人とあるとハ誰ガ火を放城戸を開ん
ぞつるかと難せ〜よ彼人笑くこるるのハ心あるれると志を
知ずうるる友二人ありるれ亦罪を脱るるの謀あるよあらぬ陥むとうへと
説諭しつかくく昨の宵風を暴くりつるよ紛れ獄舎を出塀を越塹を
渉るかう来れり哀れ御勢を向させく平泉を攻ぬ某一方の攻門を
受取く柵を接応歃を鑿ゐ〜先日早りく敗軍の怨を賞んのみ只
この一挙よいと真〜やうよ告〜ハ道の義兼欺れくその歃び大ら
ぬ夫然るとハ寔よ天祐神助と吏成らバその軍功和殿第一
あるべ〜と叮嚀よ労ひてこれハ當坐の勧賞ととく鹿毛の馬よ雲珠

鞍置るを牽立させく贈りしべ時夏ハ拜し受く帷幕の下へ退去る。

中輯第廿八　平泉役の敗北　假賢人の赦書

かくく足利義兼ハ老黨高階兵衛師勝糠田八作重正ホを招き

よのせく敵よ内應のもんあるようを説示し諸軍兵よハ時夏が脱れ帰

るるようを告させ直よ進く泉川をうち渉し平泉の柵の前後よ城

戸を稲麻の如く囲せく短兵急よ攻るるれば賊徒も矢種を

惜ぶ差詰引詰射る程よ寄るハ些射もくまされ盾を被く

閲知けり。案内知るるるれば。この日も時夏先鋒さうかてもよ

うあれば猶も大將義兼を欺くつ功を諸軍よ譲ると称しく。

隊勢を牽く斜くと東門よ攻蒐れば大将義兼の一千餘騎ハ西の

城戸をぞ攻るけるかくくその日ハ暮れども敵よ返忠のもんあるを

このくく懇軍いよく囲を解ば先陣撓めば後陣替り前あるめ

駭るれば後れるるの死骸を踏越塀よ著るの突落るれば立顯を

射く落を馳よ隙ハあるりけり浩処よ柵中よ火光炎く賊兵俄頃よ

騒動も事の紛れよ内よりして西の城戸を開知しるば義兼これを

佶く見く兵兵道ゆと麾うち揮く後れしりのを駐立くその勢も

馬を乗入れるうもれども敵出あハぞ是ハいうふと疑惑ひく退出よと

散動ほどよんそつる火光ハ倏滅く城戸ハおのづく礮と鎮陰くと

もく黒雲起り風亦颯と吹暴れく石を飛し樹を倒せば寄るの

兵られよ撲くく死るるの数十人士卒いふく途を失ひく同士撃を

くく疲を被り輾つ轉つ打撲せそが中よ高階兵衛師勝を主を

守護しく処を去らば。糠田八作重正八城戸のほとりよりの馬を乗もえ。人こなごとく狼狽る城戸へこもるあるものを力を勇しく打破りとく出ぬと呼れば声をよろべよ膂力あるもの三三十人撞搦来つ辛して丹を打砕き扉を推つ一崩よ退き出んと思ふ程よ忽然として耳辺よ霹靂天地を動し右るのくこより鬼六鶏東二左ひのくこより五十五六矢藤五正面より賊主経任猛卒まぐく二千餘人四面八方より起立く矢を射うつこと雨のごとく義兼を狙とあよと異口同音よ呼つて當る隨よ砕倒ぜば屍八横りく葦を乱し血八流れく盾を浸せり吐嗟大将義兼も狙れつぐくえをを師勝重正命を限りよ防戦ふく主を救ひやうを屈くよ走り出るを賊徒八あか脱さじとく透間もなく追蒐れば糠田重正踏留り近つく敵を撃殺ぜ。

あつくくハ禁ぐりのく数ヶ所の深疵よ斃ひ竭く神井鬼六よ撃れよろりかくし程よ義兼八百騎足らぬよ狙あされ十町あまり延くるを東の城戸を陽攻せし力野太郎時夏八兵駿駈立くそのやく先を遮り留め義兼脱る路八降参せよと呼れ八義兼主従大死よ怒く思よ致く極悪人天罰思ひ知せんと敦圍あくぶ思ふ振り出と嘯く砕立れば賊徒八颯と披き八せ引包ぐ攻くうける。いとを組し死戦ひよ寄るの士卒八過半狙れく義兼僅よ十四三騎路を棄く逃走れば時夏一騎味方よ先くち馬を駆しく追懸さくる程よ信夫荘司元晴が名代城戸三郎守詮八ちづあ時夏よ従ひく東門ハ向ひしよ力野が野心あるをえくこが隊兵を一人ぬ纏わく竊よ変よ備へしよ西の城戸の寄よ敗れうとこがりくて。

鯨波の如く起り雑兵の叫声ゆらるごとく聞えゆ当下時夏へもぐ
軍兵よ機密を告忽地備を建更しく迫る寄せを追崩れば賊徒も
時夏を資んとて柵を開かせく走出そう守詮はせんせべあさこ陽小同慌
あのもらして時夏が後よ跟死焦火影照らせるく十町あまり追ふ程。
廿一日の月出く欲くとしく白昼の如しとなれば敗兵十四五騎大将の
前後よ立て江刺のくへ敗走る間迫よ隔れども隈なき月の光。
隠るべくもあらざれば時夏ハ諸軍よ先立て蓬しかへせこ吸うけう。
城戸三郎これをとく馬よ拍乗走らく賊軍を駈離れしや
時夏よ近つく程よ弓箭刻あく声ゆう立返賊時夏誰をう追ふ。
城戸守詮あよあり箭一條受よとなつくえうの処を仲と射る。
矢来些遠うくれば袖隠の間より隅を射削うう時夏怒く些も

擬議せべ馬の平首牽向ゆべ馬ハ二の箭よ胸を射られて狂ひも
あぞ輾転び主ハ撞と反落ゆく。ちづく起も始ざうしべ。
守詮態く寄せあハせく首を取んと進む処よ時夏が家隷
矢塚達六後れ走よ走り来つ薙刀をりて守詮が馬の足を薙
倒せべ主ハ馬よ乗あぐう地上よ礫とそう伏う達六ハ透間のあく。
薙刀を晃しそ掛んとそれば守詮ハ弓をあく受とそ内いと鞍を
乗をあらく再びかゝる薙刀を反かへし衝と入りく引組く揉倒
押へく索を掛うける當下ハ野時夏ハ甲くよ身を起しく。
遥よそれば達六ハ守詮よ組れうかくてもいあぞ味方を續うぞ。
守詮が軍兵のゝ間近く走来つ救ふべくもあらざるハ間道を遠りて
逃去うかうし程よ守詮ハ時夏を撃漏しく遺恨あらくかれ

どもの軍兵ハ二百ヨ足らず。目ヨある敵と挑こ戦ふて。あやく陣歿をぐきヨあるべとゐひろへしゑ。生拘を牽立さる大将の迹を慕ふく泉川をうち渉ぜれよう。敵ハ追ざうさう程ヨ義兼ハ鎮守府ヨ落とぐあり。味方の兵を俟しうバ天明ふあるヨ集會ふの絶ヨ五百餘名ことゞ中ヨ城戸三郎守詮ハ隊の軍兵を一人の暫せず積時夏ゞ腹心の家隷矢塚達六を生拘来く戦ひの趣を告ゐけをバ。義兼感悦斜ふず。軈く守詮ヨ對面しく危急を救ふる軍功を賞嘆し御辺今度の働ひ比類なし。莊司ゞみづから来會して先鋒ヨ進まともこのうへのすあるべくず。ふれ慮足らずしく時夏ヨ欺れ家隷糠田重正いさゝ士卒の陣歿半ヨ過ふう彼時夏ハ利口ふく奸智ありまれちぐるヨあるぐれども凡ハ執權恩顧のものあり。

この故ヨ年来ふれヨ関けられく支遂ヨあるヨ及べう。獅子身中の虫といふべし。達六奴を拷問ぜバ彼奴ゞ伎倆ハ分明ふくんとく牽出しいへと下知ヨ隨ふ守詮ゞ士卒四五人索を取く生拘矢塚達六を牽出し答を揚ふく打懲らし主の刀野ゞ野心の顛末責問を大ふくねば達六苦痛ヨ堪ぜしく時夏ゞ隠匿逆意を悉く首伏を第一ヨ往任ゞ部下の偷児早蠅五頭平ヨ相譚れ足利より鎌倉へ貢献ふる金銭巻絹を畧奪せしゆ赤貝の百姓苗四郎引太郎ホを砍殺しく五頭平を救ひ又五頭平を欺ひく。八島室平ヨ牽遮し更ヨ吉見義邦を誣ふく往任一味のようを告訴し義邦逐電ふるヨ及びて時夏みづからこれを追蒐途ヨ五頭平ゞ支黨ふる野伏ホを駈催して勝沢ゆく追著ふれゞ媼子井平ヨ砍

時夏を射て守詮
達六を搶ゆ
平泉の敗軍
田重正戰死せ

立られぬくほねを拾遂げゝ賸藍玉院の弟子の女僧よ拄られく井平を撃偏し伎倆の發覚んすを懼まく室平を病床よ猛り五頭平を獄舎よ毒殺せりさん經任と舊交あるをもく時夏ハ敵よ生拘られくれども還く尊信饗應せられ更よ經任よ相譚れ逃かへりく活ありもして賊の為よ詐の計を行ひぬ又義邦主從の逐電を菌様く井平ハ箇様く義秀ハ箇様くとこの四人ハ罪あうしく罪人よあうし流言させるるまでもなくその実を吐しく義兼面色火のごとく怒る眼よ血を沃ぎく平泉のくを疾視反賊時夏いらればかくれど如く毒悪るるれり彼奴を生拘く首を鎌倉よ贈らもべ世の胡慮よなくんの小勢ありとも推よせく勝負を一時よ決もゝしとく馬を牽け兵どもと跳あがく敦圍くるのもく老黨高階兵衛進ゝ出く主を諫め寡をうく泉よ敵しゝぐ死當然の道理を述くるを敵地近うり一圓国府へ引くくれ再び奥羽の軍兵を駈催しく後日の征伐ふるべしと辭を竭しく禁めしべ義兼力及ばして軈く国府へ退却つ軍兵催促嚴重なれども寄るいくくうち負て賊よ破竹の勢ひあるべ守護郡司小戦慄れく催促よ從ハぬとかく程よ十一月よありしべ毎日よ雪降積りて人馬の駈引不自由し来春雪の解る比まぐ滞陣せん史兵粮積りを義兼迷惑しく至極しく竟よ帰陣よ一決し城戸三郎守詮ゆハ軍功の賞と名馬一匹を牽禄く式待してぞかへるかくて足利左馬介義兼ハ十一月中旬よ残兵七百餘騎をゐく国府を發く月のをくよ鎌倉よ參著し執推時政の第よいるく北條父子よ對面し合戦利あら

ざりしかの時夏が舊悪逆心の為体又彼義邦廣光并平ホハ曩ヨ
時夏ヨ誅られてく已てを始め逐電もられど素より犯せる罪の
義秀が人号宝平ホを投懲せりハその友の為よせりを潔白の人な
べ紀ケりしく信夫荘司元晴ゲ家臣城戸守詮ゲ今度の働紀彼とあく
此と称し巨細ヨ告ラく又いのあり。こい時夏ゲ股肱の癖者矢塚達六ゲ白
状ヨあつくちでめく邪正あらられう。義兼ア才短慮めて始終時夏ヨ
欺れ此度の大事を慫もう敗軍のちん咎ハ素より覚悟のうれども。
今ちく見参ヨハ人ケ面ぜよをひへと恥を隠さぢ非を飾らぢ一五
一十を述しうべ時政ちく呆れ果つもくとしく義兼の顔をのぞ打
まりつ肩揺揚く息を吻紀ろひ紀や時夏ゲ逆賊ヨ荷贍してこの
辱めあんとハ叫れば此度の敗北ハ貴所一身の越度ヨあらぢ時政も

亦不覚ん彼奴ゲ親照時ハ前婦の従弟ありしゑ愁ヨ憐愍の
誠ゲ仇となりけらし所詮生拘達六をちゑく禁獄もきそ又貴所の
褒賞ハ廣元ホと相譚ふくとめもろくも執達もきし病後の心労推察
せり退りて休足あゑへと叮嚀ヨ慰れば義時も亦情を告く頻ヨ
嗟嘆もくろうかくく次の日新将軍頼家卿ハ時政廣元ホゲ出ち
ちヨ任せ征東使足利左馬介義兼を営中ヨ召登し凱陣の儀を
ちつく見参の勧盃あり軍旅の勝敗を問ぜしく帰國の暇をあり
ケるべ義兼ハ恩を謝し執権父子ヨ別を告く足利へ帰城しつ只
管ヨ愧悔へく病著頻ヨ再発し遂ヨ逝去の空えあり鎌阿寺殿と
法号ハ嫡男義氏家督ゑり義氏のちハ後巻和田合戦の條ヨいん。
この下ヨ話かし間話休題足利義兼帰國の比北條江間義時ハ父

時政よ密語ゆう義兼敗軍の智あるを大人の壻ゆゑと誰ゆへ
ぞるものあらん又彼吉見義郎ハ蒲殿の子白塙丸なりし世よ隠れかし。
又堀子井平ハちゝのゑ家よ仕へ主の旨よ違ふをもて下野へ追
遣られしを恨ども怨ゆるゆゑ又朝夷義秀といふ猛者ハ出処
定らぬゝざれども生れゆゑの匹夫ゆゑ人ゝ時夏よ誣
られゝ骨相書をもて索られしハ有ゆゑ寃屈ゆゑ彼ハ遠く走り
深く隠れゝ刑戮を脱れしハ自他の幸ひなゝ時夏主後ゆ罪を倡て
矢塚達六を由井濱よ梟首し義邦廣光井平義秀ハゆ罪藉ハ寃
しゆゆう赦免せしゝ趣を國ゝへ徇させゆゑかくの如く行ひてゝゆ大人の
政事論を定るよ親疎貴賤の沙汰なし世よ志せゆゑ民歓人歓ゆゑ
民後よ後よゝ仇寡しゝ安全の計策之照時ゆ故をもて時夏夫

この年来情を被ひしゝど渠逆賊よ与せしゝゆゑゆ彼よ負くよりゆゑ
彼ゆ我よ叛ゆゑ達六を梟首のゝ猶豫なゝへゝゝとゆゑびくよ
諫しゝゆ時政ゝれよ後ひゝく達六を誅戮し義邦ハ四人の罪犯寃に
よゝく赦免のゝを國ゝ縣田舎おゝゆ残る曲ゆく徇させゝう信なる
ゆゑ儒仏の教誨善ゆゑ善の報ひあり悪ゆゑ悪の報ひあり天運循環
もゝとゝゝ暗君も暁ることあり奸宰も枉るゝよゝゝ義時ゆゑ賢人ハ
身の利のゆよ揣るとゝへども併忠臣義士の誠を天神鑒ゝ今この恩
赦よゝへゝなゝゝ。案下某生再説修羅五郎經仕ハゝひの隨よ寄
てゆを破りゝく威勢ちゝく奥羽を動し世よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ縁故ハ
時夏ゆ不義の資よ成るゆゑゝ亦忌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ初のごとくよ
歓待さゝゝ四天王ゆゝ亞よをゝゝゝゝゝゝゝ徳よ一方の頭領ゝう又彼淫婦

文字揃ハ経任ガ愛妾なれども時夏を釣んなる霎時その枕席をも
めさせもしられ今ハ要ゑ刀野ハ往よべくゝぶと禁めるを蘓塗鵜東二
諫くいなう此度数千の鎌倉勢を一戦ハ駆走らせもゝ皆是刀野
太郎ガ功を拍軍何ぞ一婦人を愛惜しく信をその部下ハ失ひなんや。
世間ハ女子多ク文字揃一人ハ限るべくゝぶ只彼女子ハ初の如く時夏ハ
与へゆへさるとなれハ恩を感ジ情ハ引れてゆゆく用ひゝれんとを願ふべし。
りとの約を違へゆゆ恨く必変を生ぜん賢慮を旋しゆへとハ経任
ゆゆく頭をうち掉られハ妾影あれども文字揃ゞ如ハ汝ガ美人と
稱ひるゆの然つゝとうち笑へバ鵜東二又いゆうゆ聞ゆゆゞや。
信夫荘司元晴ハ一個の孫女ありその名を筐姫と呼ぶ倣くゝ青春ハ二八の
ゝハ過ゞ沈魚落鳥閉月羞花の美人ゆゝく絲竹のゝべ詠歌ハす

儔あゝゞと人食いて。賀美栗原玉造磐井の四郡今ゆゝく従ざるもの。
只彼信夫荘司のみさゞれ寄ゆの敗北ニ来謄を冷しとをゝんゞん
口よく利ゆのをゆく且試ハ筐姫を求く御覧いへゝ拍軍ハ義経の
あん子ありと称しゆへど信夫荘司ガ従ざれゞこれを真とゝゝゝの寡し。
元晴拒ゝく筐姫を与るとを許さゞゝ又謀あり姫ハゝゝ信夫荘司ガ
白髪首をも取りつべし賢慮いゆと真実ぞゝく勧をゞ大妃ハ歓び。
微妙も謨るゆのゝれ彼筐とゆんゞゆを忘れゝゝあゆゆ鬼六
矢藤五ハ勇あありあれども才足らぞ甲乙と擇んゝゝ汝彼処へ赴くべし。
文度をせよといそゞせゞ鵜東二雅辞氣色あくゝけゆゝひぬ某
彼処へ赴くとも十ヵゝく九ッハ元晴決しゝくゝけ引べゝゝゞ。ゝれども一ゝび
彼処ハ到ると紀ハその言語ハ就きその案内ハ就妃後日ハ謀を行ふハ

便りその饋物ハ箇様〳〵く又從者ハ如此〳〵とちゆまゝよ注文し次の日物すく整く礼服ゆく馬ようち跨り戚卒廿人よ五荷の投瓜を扛擔せ高舘を望くいそぎ出り不題城戸三郎守詮ハ國府ゆく摠大將義兼よ辞しこれ隊兵を率く高舘ある圓山の舘よ帰陣し合戦の勝敗時夏が逆心の支の趣矢塚達六が白状よりつく義邦以下の人くよ罪あるす顕然るす。自分の軍議異見あるくを元晴義邦よ吉〳〵べ元晴ハさ〳〵吉見主從ハ寄るの敗北を風声よ物〳〵今又時夏が逆謀を巨細よ学く遺恨よ堪ぶ。ゆえども守詮矢塚達六を生拘しゆより吾黨の宛狂ゆ釋く今ようよ天日を見るとハ三郎が賜ありとく義邦も廣光もその歓び大るゆぶ主從齊一席を起く守詮を再拜し〳〵義邦ハ帯〳〵る重代の刀を取く守詮よ与へ〳〵べ元晴も亦その功労を褒美し〳〵く食禄を加増す。かくく又義邦ハ元晴廣光とうち相譚ひ既よ世間廣くゆ〳〵ふ。この処よ〳〵るすを義秀よ〳〵せぶへ信ゆ〳〵く恨〳〵ら彼人今ゆゆ旅よありとも越中ある稲向許消息せば傳へ学くとも〳〵べし。廣光彼処へ趣くべ〳〵と〳〵く心ぞ〳〵ハ早れども時既よ去冬の最中ゆく北国ハ雪深く行客途を去あぶ雪吹よ撲れ雪崩よ埋られ死るめく多るへ。常よ〳〵くとめ〳〵あるぶ難義の時〳〵春を待とも遅ゆあ〳〵ぶと元晴只管制く遣ら〳〵ぶ義邦もゆ〳〵ふ。心〳〵ゆく〳〵ひ〳〵べ老人の議よ後ひて廣光を禁めゆ〳〵とゆく〳〵ろわどよ。

十二月の朔よ〳〵べ駒形村ある田丸標吉ハ養母の忌果く後れド〳〵く須主の舘よ参りて義邦笹姫と婚姻の祝言を述曩よ黒萩よ

預られ、沙金四十両を齎し、廣光より遍与せしめ、義邦是を
実とうち笑ひ、標吉が律義なる何ぞこの金より及んや、これ対面ぶべし
と、元晴が由を告させ、翁婿列座し、標吉を召迎、著義邦
あづかの忠孝を誉め、更めて件の沙金を賞禄よとせ、又時貞が逆謀
達六が白状の趣を告しらべ、標吉が義邦の厄の釋んとはかるを祝
あらく、沙金ハ有り合ひ、固辞るを、さぞ不敬あるべしと、廣光がいふよ
ぞ、受納めて、拜謝せり、當下元晴、舎笑て、標吉郎これ汝を
めて、駒形村の長とす、他村の民を領移さんと豫あり、さんども、
大敵、経任、郡より境を戍るを、ありあるべかりしくしく民を
動しらし、吉見殿も世間廣くありぬ、汝とが館より留りて、
この君より仕へよ、もしれば、駒形村を、食邑より充行ふものと本姓

馬琅より立ち、嗣忠と名告れり、これ、かとが二人の子共、嗣信、忠信が、
判官殿より仕へ、忠心より擬ひ、のを、ひとりを、はよと、説示せば、標吉
あらく、感悦し、賢息達の片名、あぐ、ぬ、ん、の分より過ぎ、併望を
足り、面目これ、あるとて、且駒形の宿所より退去物、よく取そのへて、まゐ
ん、と、答て、速侍より退去く、両老黨、昌甫、守誉より恩を謝し、歓びを述べ、
駒形村へ還りけり、暫しく、水草十郎、城戸三郎、小遠しく、主のそとへ
来りけり、平泉の賊徒、蘇塗、鵜東二暴道と、名生、の、の、経任が
使者と、称しく、美酒、乾魚、巻絹、など、駿齋し、主君より見参を、乞ひ、追
退けいん、狡撃、留いん、狡と、ひ、元晴、空く、頭を、傾け、逆賊、経任、故あり
あらく、使を、遣し、物を、贈るハ、実情、よあらぬ、ひ、ひが、要害を、ん、ゐあるべしと、さんば
とく、数やも、足らぬ、小賊、ホが、首取て、何ふ、せ、これ、出會ぶへ、臆ひ、よ、ひ、

冠者主従ハ且く奥へ避かへそのもとに召べと居おくるまとりも節らぬ武士
凛然騒ぐ氣色ハおろ〻〻現支の為体ひとりみあれ使者あれば義経も
廣光も陸をおくり次の間へ避けるく様子を窺ふ程よ執権の者黨ども
てもおく運ぶ贈物ハ白水の臺よ白銀百枚練絹五十反綿五十屯美酒
十壺乾魚の折櫃十五前処陝まで扛居くうさる程よ蘇塗鵜東二
暴道ハ若黨ども導れく過る廊下も長袴稜取おぐくハ方よ
配る眼光人を射く一癖あるべ兄向魂佩くるく長剣よ歩の運びを
剣難身を切るごと兄寒風よきのふの雪の素書院怯ぢ臆せぬ
進ミ来つ元晴よ長揖しく東面の坐よ著ぬ畢竟主客の問答
如何そハ次の巻よ解分るをそくをくん。

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之四終

相陽 高見弘忠 著

續日本朝戰畧蒯

全五冊

世言正編ハ既ニ行ハレ久シク口ヲ盛ナリ而メ其近世戰略ニ関ハ既ニ一巻ヲ刊紙數充リヲ以テ記スル能ハズ故ニ今般先生ニ乞ヒ新ニ続編ヲ發兌スル所ノ其記載スルヤ文化年間曾西亞人蝦夷地ニ入寇スル ニ始マリ 次ニ大和長防又西東 戰ヒ 師東征尋テ佐賀台灣ノ諸役及ビ朝鮮江華島ノ捷ニ終リ其中大小諸戰智將勇士奇勲偉功ヲ洩スル無シ即チ武家必讀ノ書タルハ言ヲ俟タズ今日開明文化 由 興ル所以スル者マタ戰ヒニ出ヒハ人ノ尊卑ヲ問ハズ有志者ハ此書ヲ閲セル可ス四方君子幸 購求シテ其奇書タルヲ知リ玉ヘト云フ

大坂書肆

文榮堂　前川源七郎謹白

右書各府縣下普ク書林ヘ輸出有之ル間御手寄ニテ御購求下サレ度ク